
イプシロンの咆哮

浜田色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イプシロンの咆哮

【ISBN】

N47170

【作者名】

浜田色

【あらすじ】

『アルファ』といつも『犬』シリーズ三作目になりました。

今回は、前作を読まなくて読めるようになります。

いつもの風景

梅雨も明けたばかりの、鬱陶しいくらいの夏の太陽が、白いスニーカーに反射して眩しい。灰色のアスファルトを蹴る音は、残りわずかの時間を一秒でも無駄にしたくない思いの表れだつた。バタバタという音が、階段を不機嫌にさせる。細かい砂埃が、紺色のスカートに引っ付いて抗議しているようだ。

橋爪早苗の通つている中学校は音楽と美術に力を入れた中高一貫の私立学校で、彼女は音楽コースの中学三年生だ。

「やつぱいよ～。ギリギリセーフいけるかなあ。」

廊下を風の様に走つて、勢いよく教室のドアを開ける。

チャイムの音と共に滑り込んだ早苗を、拍手で迎え入れたのは隣の席の内気な青年だつた。

「お、おはよう、橋爪さん。」

少し掠れた声は、遅い変声期を迎えているのだろうか。笑つた顔は十五才とは思えないほど幼い。早苗は、呼吸を整えながら机の中に教科書を荒っぽく納めると、「オハヨー、神崎君。」とにこやかに返事をした。

「お、おは、おは・・・よう。」

顔を真つ赤にして恥ずかしそうに話す青年を、早苗は苦笑いしながら、

「神崎君つてさ。三年間同じクラスなのに、まだ、人見知りするんだね。」

と、からかつた。

「いや、ち・・・違うよ。まだ、眠たくて、ボーッとしちゃつて。」

おどおどしていて華奢な体。長い手足が頼りなく揺れる様子が、いつそう神崎直人を氣の弱そうな男の子に見せるのだ。

突然、早苗が立ち上がつた。

「わーーーーしましたあ。ビリビリよ。」

「ど、どうしたの？」

「宿題、忘れてた。」

もはや、恒例行事なのだ。直人は笑いながら。

「数学の宿題なら、ノートあるけど、見る？」

「ほほほ本当れすかつ。」

特徴のあるアニメ声がさらに際立つた台詞だったが、何も意識しているわけではないところが、たまに直人の笑顔を作り出す原因でもある。

「うん、大丈夫。どうぞ。」

「ははー。有難うござります。神崎様。」

早苗が、時代劇でよく見る『お殿様に平伏す』ポーズをとつてみせた。

「もう。いいから、橋爪さん。宿題やりなよ。」

「ありがとう。」

高速でシャーペンを動かす指は、田の上のピアノの練習の成果かもしれない。

「ありがと。神崎君、助かっただよ。今度何かおくるしよ。」

「別にいいよ。」

直人が顔を真っ赤にして俯く。

その柔らかい頬を、後ろから両手で触れられつつ、首筋に息を吹きかけられたのだから、直人は「キヤツ」と女子の様叫びを出してしまった。

「神崎は、本当にウブだねえ。」

「こら、龍一郎。神崎君をからかわないの。」

直人の後ろに座っているのは、並木龍一郎だった。少し赤く染めた髪と片耳だけつけられたピアスが印象強くて不良に絡まる事が度々あるが、彼は『俺は見た目だけでこくこく真面目な中学生だ』

と否定している。

その中学生が、脚を机の上に投げ出して、直人の肩に乗せて笑っていた。

「龍一郎。何してんの、神崎君も怒つていいんだよ。」

直人が弱弱しく、後ろを振り向く。

「並木君。ちょっと・・・。」

龍一郎のピアスがキラリと光つた。

「いや、神崎。お前の言いたいことは、よく解る。だけど、よく考えてみろよ。何で俺がわざわざお前のズレ落ちそつた撫で肩に長い足を置いているのか・・・。」

「えつ。」

「まあ、俺が全治二ヶ月の脚の病気だと思つてほしい。バイクで転んだんだけども。ギブスを付けられて膝も曲がらない、一回でも曲げてしまえば即切断だつて医者が言いやがつた。だから、俺だつて本当は嫌なんだぜ。嫌だけど仕方ないから、こんな体制になつてんだ。それを、お前は・・・どう思つ?」

直人は、口クリと唾を飲み込んで。

「いいよ。僕の肩なら、いつでも使って。」

早苗が机を叩いた。

「ちょっとー。何でそんな事になるのよ。嘘ばっかり言つて!」

「えつ。嘘だつたの。」

龍一郎はケタケタと笑つた。そのまま、優しく足を退けた。

「足は、治つたよ。ありがとな。」

「・・・。」

「それより、早苗。今月の課題曲は、もう弾けたのかよ。俺と神崎はもう合格点貰つたんだぜ。」

「うつそー。」

「居残り決定だな。」

「まだ、大丈夫だもん。二日残つてるもん。」

「テレビの見すぎじゃねえの。家帰つても練習してないんだろ。」

「言つとくけど。テレビは、見てないよ。」

「テレビは？」

直人の絶妙なツッコミ、早苗は「つるわこ」と叫んで直人の長い前髪を掴もうとした。

直人が、すばやく身を退けた。

「もう、イケメンなんだから切っちゃいなよ。その前髪。」

「絶対ダメ！」

この時だけは、気の弱い直人とは思えないくらい強く否定される。早苗は、呆れた顔をして、借りていた数学のノートを直人に返した。

「本当、勿体無いよお。」

もう、同じような朝を何度も迎えただろう。

居残らないよ！」

早苗はピアノの先生になるという夢があった。幼い頃に幼稚園のクラスで何人かは、同じ夢を持った子供はいただろ？

その同じ夢を十年間、彼女は抱き続けているのだ。
決して自分に才能があるとは思えない。こんな才能溢れる同級生達に囲まれて、劣等感ばかり感じてしまう。今だつて本当ならとつくに皆が終わらせているはずの課題曲を聞きながら、居残りの恐れがあるくらい下手くそな自分の腕を呪いそうになつた。

ピアノは好きだが、ピアノ無しでも生きられる。

だつて、そろばっかりだとカワイイ服も買えないじゃない。

「ねえねえ、放課後の練習付き合つて～。」

鞄を肩に担いだまま、龍一郎は面倒臭そうに。

「なんで？俺、居残る理由なんて無いじやん。」

「お願いします。鬼コワイ原西先生のゲンコツだけは回避したいの。」

「両手を合わせて挙げるふりをすると、直人は持つていた鞄を机に下ろした。

「僕、いいよ。何も予定ないし。」

「えつ。本当に良いの。ありがとう。神崎君はやっぱ優しい人だよ。」

直人が早苗に崇められている様子を、龍一郎が少し羨ましそうに見つめた後、ダルそうに鞄を肩から外してため息をついた。

「まあ、確かに？天才ピアニストの俺にお願いしたい気持ちは分かるけど？仕方ないから手伝つてやるけど。てか、あのジジイ。本当にこの「」時世に関係なく殴るよな。」

直人は苦笑いしながら、「僕、殴られたことないよ」と言つと横からゲンコツが入つた。

「お前は、ハラニシのお気に入りなのつ。」

「いつた・・・。そんな事ないよ。僕だつて怒られるよ。」

「まあ、ボコられるのは俺が悪いんだけど・・・。ピアノに俺のサイン書いたり、楽譜見て来るの忘れててサボつてんのバレたり。勝手に教室でエレキギター弾いてみたり?ま、当然起こられるわな。まるで、武勇伝でも語つている風な言い方だつた。」

「でも、ハラニシは徳田の可愛がり方に比べれば許せる程度だけだな。」

「徳田先生?」

きやー、と叫んだのは早苗だ。

「あの先生。絶対に・・・ホモだと思うの。」

間に入つた早苗の目がキラリと光つている。

「お前、腐つてんな。」

「くさつてません!」

龍一郎にもゲンコツが入る。

「並木君はそう言つけど、徳田先生つて優しいよ。真面目だし。生徒指導の先生だから、ちょっと厳しいのかもしないけど。この間だつて、カツアゲされそうになつたんだけど助けてくれたんだよ。」

直人の言葉に、一人は顔を見合せた。

「ちよつと待てよ。カツアゲつて誰に?ここのは生徒か。」

「ああ、そう多分。でも、同級生で見ない顔だつたから。後輩なのかな。」

「後輩・・・ね。」

直人の見た目は知らない人間から見れば、中学一年生でも通るのだろう。一人はとても呆れた顔で。

「行くか?早苗、マックおこれよ。」

「うん。わかつた。」

「えつ!なんで、一人とも無視するの?待つてよ。おいてかないで

よ。」

龍一郎の呆れ声が。

「お前、たまにだけど。ゲンコツしたい時ある。」

訳がわからず直人は首を傾げた。

「さつきだつて、もう殴つたじやないか。」

廊下で直人と龍一郎が待つていると、引き攣つた笑顔の早苗が戻つて來た。

「ちょっと。聞いてよ！ハラニシの奴『ほー。言われる前に居残りか？その努力が報われればいいがな。』・・・だつて。ムカツク！」

あずかつた鍵を龍一郎に放り投げる。授業外でピアノを使う時は教員の許可がいるのだ。

むくられた早苗を慰めるのは、大体が直人ではなく龍一郎が先だ。

「まーまー。さつたと終わらせて帰ろつぜ。練習すれば絶対に出来るつて。」

「私はいっぱい練習しないと出来ないの。」

「橋爪さん、がんばろう。」

遅れて直人が声をかける。

龍一郎は、まわりに天才児といわれて小さな頃からテレビで持て囃されていた。

その外見に似合わず、纖細で多彩な音を出す事ができる。せせらぎであつたり、火山の噴火であつたり、小鳥の囀りであつたり。

様は弓を引くことが多いのだ。

同じ曲でも、早苗が弾くのとでは大違った。

「お前、ちゃんと記号読めよ。ここは流れる様に弾くんだって。」

「もあ、精一杯してるので。どうをどうすれば良いか具体的に言つてよ。」

龍一郎がしばらく考えた後、

「あー。そういうの俺苦手。」

「ちよつと~。」

「指を鍵盤から離すタイミングじゃないかな。」

直人が小さな声で呟いた。

「ホントに? ジャあ、ゆっくり離せばいいの?」

「多分、次の指が音を出す直前、くら~。」

「ありがとう。」

龍一郎が口をへの字に曲げた。

「なんだよ。神崎ばっかり。」

「並木君は次の曲、もうもらひてるんだよね。」

「お、おう。」

「すじいなあ。僕はまたやり直しつて言われたから・・・さすがだね。」

「ふつ、それほどでもないぞ。龍一郎をまと呼びたまえ。」

早苗が慌て出した。

「えつ~ちよつと待つてよ。『もらひた』ってパスしたつて事?」

「まあな。」

教室に暗雲がたちこめる。明らかに、早苗の体から出たものだった。

「ダメだ~。やる気無くなつた。」

「早え~よ。」

「橋爪さん、居残りになつひやつよ?」

がつくりと肩を落としたまま。

「いいの。もう、いいの。」

「どいたどいた。」

龍一郎が早苗に体当たりして椅子を奪い取る。

「せつかなんだしよー。弾いてやんねーと可哀相だろ。」

骨張った指がしなやかに動き始めた。軽快なリズムが気持ちを浮上させる。早苗が何か思い出した様子で顔を上げた。

「あつー。その曲知ってる。今やつてる映画のだよね。観に行きたいんだー。」

龍一郎が口をとがらせた。

「じゃあ・・・行くか。」

「うん。三人で。」

「ひつ・・・。」

「神崎君、どうしたの?」

「いー、ごめん。僕はやることがあるから。」

直人は龍一郎の殺意を感じ取ったので、きりきり正しい答えを出す事が出来た。

「そつかあ、残念。」

今更だが、早苗は非常に鈍感な子供だ。

「直人もなんか弾けよ。」

話しへを変えようと、龍一郎が直人を誘った。

「じゃあ、課題曲を弾こうかな。」

「よっしゃ、俺が見てやるよ。」

龍一郎は袖を捲ると、意地悪そうに笑った。

直人は恥ずかしそうに笑うと、ポケットから髪どめピンを取り出して前髪をあげる。そのままだと長い前髪が邪魔になつて、楽譜が

よく見えないからだ。

ぐるりとした瞳が、どこか小動物を連想させた。日に当たらない肌が女の子のように白く透き通っている。

「やっぱり、そうしてたら絶対モテるのになあ。」

早苗がこつそり写メールを撮ろうと携帯を取り出しだが、直人にバレて睨まれてしまった。

「ねえ、神崎君はどうして前髪伸ばしてるの？」

「えつ、お前。それ聞くの。」

龍一郎が、針が刺さったようにピクンと飛び上がった。直人も、今は顔がはっきり見えているので丸い瞳をパチパチさせた。

「ねえ、何で？おまじないなの？」

「それは、違うだろ・・・。なあ、直人。」

怖々様子を伺う龍一郎は、早苗の方を向いたときだけ『何でそんな事聞いたんだよ』と口をパクパクさせた。直人は、下を向いて言いたい言葉を見つけたようだ。

「やつぱり、落ち着くから。かな。」

「それだけ？」

「やつぱり、人、苦手だし。」

早苗が困った顔をした。

「私と龍一郎も怖いの？」

直人は、とんでもないと首を振る。

「怖くないよ。」

「うつぎやーー。」

突然、直人は激しく早苗に抱きしめられた。

「よかつたあ。ねえ、龍一郎。」

龍一郎は、直人に死神のような笑みを浮かべた。

夜の闇と燃える夕日は

「神崎君。それでも練習してきたのか？先週から、ちつとも変わつてないんじゃないか？」

原西の言葉が胸に刺さつた。申し訳なさそうに直人が頭を下げる。丁度、ピアノの前で懺悔でもしているかのようだ。

「何か悩みもあるのか。これでも一応教師だ。話しぐらい聞いてやるさ・・・なあ、どうしたんだ？」

直人は首を振つた。幼い子供ならまだしも、十四にもなる子供が

するのだから原西もどう扱つていいいのか分からぬようだ。

「君を三年間見てきたけれど、君は珠にそういう時期が来るよな。スランプというか、停滞期というか。自分で原因是分かつてるのか？」

「・・・はい。」

「何なんだ。その原因は。」

直人はまた俯いて動かなくなる。こうなつてはもう彼が何も言わないので、原西もよく分かつていることだつた。

「言いたくないなら、それでもいい。けど、俺はそんな訳の分からぬ悩みで、君を許すわけにはいかないなあ。皆そうやつて教えるんだ。君にだけ特別扱いはできない、わかるだろ。」

「すみません。僕・・・。」

原西は、ふうっ、と息を吐いた。白髪の混じつた髪をボリボリかくと開いてあつた楽譜を閉じた。原西も、直人が急けていたとは本気で思つてはいな。

「もういい。今日は帰りなさい。」

「すみません。」

とぼとぼと落ち込んだ直人が教室を出ようとドアに向かう。思い出したように原西が直人を呼び止めた。

「ああ、そうだ。徳田先生がフランスに留学生を推薦する事になつ

てるんだが。お前をどうかと言つてゐるが。」

「えつ、僕ですか。」

前髪が揺れて、赤く染まつた頬がよく見えた。

「断る理由がなかつたから、話しだけ伝えておく、と言つておいた。家に帰つて」両親に話しどけよ。お父さんだつて喜ぶんぢやないか。

「

直人は下唇をぎゅっと噛んだ。

「お父さん、今フランスにいるんだろ?」

「・・・はい。」

それきり原西が何も言わなくなつてしまつたので、直人はお辞儀をして部屋を出た。

時間はもう日が落ちて廊下は真っ黒なトンネルになつていた。何処へ続くか分からぬ恐怖に青年は「ゴクリと唾を飲み込んだ。顎を引くと、完全に顔は前髪で見えなくなつてしまつ。どちらが前なのが分からぬいくらい。

「怖くない。」

ずっと歩いていれば、それはただの闇なのだから悪さはしない。

直人はピアノを弾く時以外、前髪を下ろしたままだ。だから、昼間でも他の人よりは少し暗い世界を歩いている事になる。明るい所も暗い所も、彼にとつては怖くて仕方がない物なのだ。

早足で歩いていた足が止まつた。

「僕はどうすればいい?」

闇の中から、返つてくるはずの無い返事を待つてゐるかのようだ。

「本当は、まだ考へてるんだ。」

少しだけ顔を上げると、現れたばかりの月が優しく彼の顔を照らした。

だが湿氣を含んだ闇は、まるで生き物のようにに重たく少年の肩に縋り付いて離れない。

「僕は、まだ・・・彼を、助けてあげられるんぢやないかつて

今日も、三人は教室で練習していた。

早苗は一人の微妙な助けを借りて、居残りは阻止できるだらうレベルまで上達していた。

「よかつたー。これで夏休みの補講はナシー。」

「多分だぜ。た・ぶ・ん。」

「龍之介のイジワル。なによ。」

早苗がふざけて龍一郎に尻アタックした。

「いつてーな。」

「大げさねえ。」

直人が困った顔をしていたが、龍一郎のポケットから何かが落ちるのを見逃さなかつた。

「並木君。ポケットから何か落ちたよ。」「あ。」

龍一郎が落としたのはライターだった。早苗が顔をしかめる。「こらー。アンタ煙草吸つてるんでしょう。止めなさいよ。」

「ちげーよ。」

「じゃあ何で、ポケットから出て来るのよ。」

「さー何でかなあ。」

龍一郎が力チ力チと火を付けたり消したりして遊んでいる。僅かな空気の違いに気がついて龍一郎が眉をよせた。

「おい、神崎。どうしたんだ?」

すぐ隣で僅かに震えている直人がいた。前髪のせいで顔が見えないが、それでも分かるくらいの恐怖。

「早く消して・・・。」

「なーんだ、そんな事か。大丈夫だつてば、火遊びにも入らねーよ。ほらほら。」

龍一郎が面白がって直人の前で火をちらつかせる。

「消してつてばっ。」

「龍一郎、嫌がってるでしょ。止めなよ。」

早苗が直人を守るので、龍一郎は「ちえつ」と、つまらなさうにポケツトにライターをしまった。

「はあ・・・はあ。」

「大丈夫。」

直人が喉を苦しそうに押さえている。

「なあ、悪かつたつてば。」

龍一郎の手が直人の背中に触れる。

すぐに龍一郎はびっくりして、その手を引いた。

「すごい汗。」

「もしかして、火が怖いんじやないの。」

「ご・・・ごめ・・・迷惑かけて。」

直人の顔は真つ青だつた。

「いや、ホントに、ゴメン。俺、こんなつもりじや。」

「大丈夫だから。」

早苗が慌てて楽譜を片付け始める。

「ほら、行こうよ。もう下校時間過ぎてるよ。」

周りを見渡すと校舎は静まり返っていた。教室の隅っこから何かが、息を潜めてこちらの様子を伺つていてるようだ。真つ黒なピアノも、冷たい金属の塊のようにみえた。

「怖いね。」

早苗がポソッと呟いた瞬間。

教室が赤く染まり始めた。壁も、ピアノも、真つ赤な焰に侵食されたようで、小さく悲鳴をあげたのは早苗だった。

「夕日だよ。」

龍一郎が諭す様に言つた。二人に安心してほしいと思つたからだろう。

「やっぱり怒ってるんだ。」

直人が呟いた。

「私たち怒ってないよ？神崎君が心配なんだよ。」

「あんな所に閉じ込めたから。」

「二人の会話が成り立っていない事に龍一郎が気づいた。」

「お前さつきから訳わかんねえよ。俺達に伝わるように説明してくれよ。」

龍一郎の言葉に我に帰った直人は、「ゴメン、独り言」と無理矢理作った笑顔を見せた。

徳田はその独特の舌つ足らずな口調で、よく生徒に真似をされている。

直人は徳田に呼ばれて職員室のドアを叩いた。恐らく、原西が言つていた留学の件だろつ。直人の顔は暗い。

実はまだ誰にも打ち明けていなかつたのだ。

「原西先生から留学の話しさ聞いてんだよね。」

「は、はい。」

「じゃあ、『両親とも話したいから、いつが良いか聞いといてくれる?』

「あ、あの。」

「何?」

直人が迷つてていることなど考へてもいよいようだ。

「僕、ちよつと・・・まだ悩んでいて。」

徳田は信じられないとでも言いたげな顔をした。

「あのねえ、神崎君。これはすごく名誉な事なんだよ。誰でも行けるわけじや無いって事わかつてゐるかな。理由でもあるの?」

直人は首を振つた。

「いえ、特にね。」

「無いんじやん。じゃあ、迷う事なんてないんだから、素直に返事した方が賢いと思つよ。」

「・・・はあ。」

徳田は満足げに、にんまりと笑つた。

「ああ。だけどね、留学するならあの子よりも仲良くするのは止めときなさい。」

「へつ?」

「並木と橋爪だよ。」

聞こえるか聞こえないかくらいの小さな声、直人の使い慣れてい

る耳がやつと音を拾つ たくらいだ。

「あんな成績も悪いし態度も悪いクズみたいなのと一緒にいるのは
良くない。付き合いを変えた方がいいって言つてるんだ。あんなの
足を引っ張られるだけで何のメリットも無いんじゃないかな・・・」

と、強く直人は背中を叩かれた。

「と、思つてね。ハハハ、そんな顔するなつて、神崎君の事を思つ
てじゃないか。」

直人の頭は真つ白だった。

徳田の笑い声が直人にとつて、これほど耳障りな事はない。
非力な拳を握りしめて、怒りに震える自分を止める気などない。
いつもはずつと奥に忍ばせている直人の『なにか』が喉から零れ
出た。

「僕、お断りします。」

「何だつて？」

「どうぞ、他の人を推薦してください。」

そう言つと、直人は職員室を飛び出していった。

「ねえ、明日の映画のチケットを買ひに行つた方が良いと思つのよ
ね。」

「あーそつか。水曜日だもんな。」

階段を下りながら、早苗と龍一郎は次の授業がある教室に移動中

だった。

「あ、知つてゐる？あそこの映画館つてね、『カップル割引』あるんだよ。」

「へつ。」

龍一郎が素つ頓狂な声を上げた。まさか、そこまではリサーチしていなかつたらしいが、思わぬ言葉が出て顔を赤く染めた。

「えーそななだあ・・・で、で、で、でも明日は皆同じ値段なんだし、いいんじゃね。」

「うん。そうだよ、だから早めに買ひに行ひつて言つてゐるんじやん。す」¹並ぶんだから。」

「・・・うん。」

「でも、なんで神崎君来れないんだろうね。すつぐ残念だなあ。」

「・・・さあ。俺も、残念だな。」

複雑な顔を浮かべながら、龍一郎は「じゃあ、放課後な」と踊り場の階段を見つめた。情けない自分の顔に、こつそりビンタをして上を見上げると、一度、徳田が不機嫌そうな顔をして降りてくるところだった。

「何だ？目が合つたのに挨拶もなしか？並木は。」

早速、嫌味を言われる。いつもの事なので龍一郎は反発もせず、面倒臭そうに「すいやせん」と肩をすぼめた。

「お前みたいな奴が、なんで神崎と仲が良いんだ。齎して、金でも盗つてやしないだろうなあ。」

「はあ。」

徳田は、龍一郎の赤い髪とピアスをじろじろ軽蔑の眼差しで見つめるべく、鼻で笑つて通り過ぎていつた。

「お前が足を引っ張つてんだろう。神崎の留学の件だつて、事情が分かればすぐにお前を退学せらるべうい訳もなうことなんだからな。

「何の話だよ？」

「とぼけるな。お前が何か言つたんだろう。そつもなけりや、留

学の話を断るはず無いじゃないか。」

舌つ足らずな声が、階段の下でこだましていた。

不快な顔を上げると、直人が困った様子で階段の先で立っていた。

龍一郎と徳田の会話を聞いてていたらしい。

「どういう事だよ、直人。」

直人は前髪で視線を隠した。

「俺のせいでの留学の話し蹴つたつて・・・。」

「違うよ。」

「じゃあ、徳田が言つた事は何なんだよ。」

「知らない。」

龍一郎がその華奢な腕を掴んで、壁に直人をたたき付けた。
「んな訳ねーだろ。信じねーからな。アイツの事だから、どーせ俺
といふと留学出来ないとか、成績が落ちるとか・・・そんな事言わ
れたんだろ。」

直人がハツとして顔を上げた。龍一郎の苦痛に歪んだ顔が、はつ
きりと瞳に焼き付けられた。

「・・・ちきしじう。」

「並木君は何も悪くないんだ。」

やつと言ふた言葉も、龍一郎の大声に搔き消される。

「お前のそういう所が嫌いなんだよ！」

胸倉を掴まれたと思うと、頬を殴られた。直人が勢いで廊下に倒
れる。

「神崎くんっ。」

早苗の声だろうか。直人が思つたよりも下に落ちてしまったから
かもしだれない。

直人の背中にあるのは、下に続く階段だった。

「まだだ。」

直人が心の中で舌打ちした。

全てがスローモーションの様だ。

直人は落ちる恐怖よりも別の事で頭が一杯だつた。地面上に落とされて氣を失うまで、絶対に自分は冷静でいなければいけない。

(心配するまでもないが、『彼』は今此処にはいない。ずっと地下で彼の声が届かない箱の中でひつそりと、彼を待ち続けてはいるのだが。)

強い衝撃が青年の体を襲つた。

「あつ・・・つ・・・。」

目が覚めた直人の下には、龍一郎が倒れていた。

「俺の方が痛えよ。」

「並木君？」

「あのままだと、頭からいつてたぜ。俺が庇つたお陰だからな。」

踊り場にある大きな鏡が、階段を駆け降りる早苗を映す。

「大丈夫！ 怪我してない？」

半分泣きながら、鏡にもたれる一人を揺する。

「今、原西先生が救急車呼んでるから。」

「・・・ごめんな。」

「バカ。なんでこんな所で喧嘩なんかするのよ。」

龍一郎が、ボンヤリとした目で早苗の頬を触ろうと手を伸ばした。だが、早苗は視線の端で光つた何かに意識を奪われて、体を引いて

しまった。それが、早苗が助かった理由でもあった。

上から下に閃光が走った。

ごと

重たい音と共に、何かが割れる音が、階段をこだまする。
龍一郎の後ろにあつた鏡が割れる音だつた。

水平にビビの入つた鏡は、ギロチンの様に彼の日に焼けた腕の上に落ちたのだ。

「あ、え？」

直人は壊れたテープレコーダーのような声を上げた。

龍一郎がその場に崩れ落ちる。彼の切断された肘の辺りから、遅れて鮮血が噴き出した。見る見る顔色が悪くなる。失血しているからだろう。

残された二人は、床に散らばつた鏡の破片に照らされて、キラキラと銀河の中にいるようだ。広い銀河の中に一人だけ取り残されどうしようかと途方に暮れている。

「ひ・・・いあ・・・あああ。
早苗の呟き声は弱く、隙間を流れる風のよつだった。

選択の時、歪んだ時間

早苗が戻ると、直人はピアノの前に座つてこひらを睨んでいた。力のない足取りで、彼女は涙を我慢するのが精一杯のようだ。

「まだ、手術中だつて。」

直人の隣に腰をおろして遠くを見つめる。

「やつぱり、無理みたい。だつて、そりやあそだよね。あんなの、くつつく訳無いもの。」

ぱろぱろと零の様にこぼれる言葉が直人を絶望へと導いてゆく。

あの惨劇を思い出すと、頭が真っ白になる。

閃光と赤い床が脳に焼き付いて何度もフラッシュバックする。

震える手で頭を押さえるが、直人の見た目よりも大きな手が優しく髪を撫でた。

「僕のせいだね。」

「そ・・・。」

「そうかもしれない。

その言葉が自然と出そうになり、早苗は両手で必死に食い止めた。

私、なんて事を言いつもりだったの。

震える手で直人の肩を抱きしめて、しばらく時間が空いた後やつと「ちがつよ」と言う事ができた。

彼女は、その言葉で少なくとも彼を不幸にはさせない自信があつた。例え嘘だとしても、自分だけは直人を守らないといけない。で

ないと、直人はこの世からいなくなってしまうのではないか。涙が溜まつて、視界が歪んでいるから、直人が今どんな顔をしているのか分からぬがきつと同じよう絶望しているはずだ。

失うことが恐ろしくてたまらない。

それは龍一郎も同様だ。

年月はかかるかもしない。だけど、龍一郎はきつと立ち直るけど、直人は・・・。

「神崎君が悪いんじゃないよ。」

早苗の一言で、彼はきつと救われるはずだ。そう、彼女は思っていた。

「ダメだよ。」

早苗がもう一度同じ言葉を注げりとした。

「神崎君・・・」

直人は首を強く振った。

「あの時も、そうだったんだ。」

「あの時?」

前髪の間から奇妙な光が見え隠れする。

「僕は、逃げた。」

「ねえ、何の事を言つてるの。今は、龍一郎の話をしてるのに。前にもあつたよね、そういう事。」

早苗は話が噛み合わないことに苛立ちを隠せなかつた。いや、自分が置いていかれるのが嫌だつたのだろう。直人の目線は、ずっと

先。早苗の見えない世界を見据えているように思えたのだ。
「どこ見てるの？こっちを向いてよ。もう・・・分かんないよ。」

直人は、絶望なんてしていなかつた。

早苗が理解できない世界の狭間で悩んでいるのだ。

「もう、同じ思いはしたくない。もう、逃げられない・・・今、僕は選ばなくちゃいけないんだ。」

「かんざき・・・くん？」

直人が立ち上がる。

強い風が吹いて、前髪が揺れる。

早苗を見る目つきがいつもと違うかった。もつとおどおどしていて優しかつたはずだ。

「ゴメンね。僕、行かなくちゃ。・・・を、を変えるんだ。」

「何て？よく聞こえないよ。」

細長いからだが早苗の腕を摺り抜けて廊下に飛び出す。彼は前からこんなに早く走れたのだろうか。

じゃあ、いつもの早苗がよく知つている直人は本当の直人ではなかつたのだろうか。

「ど、どこ行くのっ。」

叫んだ頃には直人の姿はどこにもなかつた。

ただ、静かにピアノだけが教室に残されて寂しそうに佇んでいるだけだつた。

「嫌だよ。一人にしないでよ。」

早苗が泣きながら、一人ぼっちで廊下を歩く。

丁度、病院に向かう原西の車に乗せてもらい、早苗は流れる車の

ライトを見つめながらいろいろなことを思い出していった。

「一番悪いのは、きっと私だ。私が一人をもつときつく止められれば、あんなことにはならなかつたんだ。」

運転席の原西は何も言わない。

「映画、行こうつて行つたじやんかあ。バカア。」

今でも思い出す。

階段から落ちてゆく一人。

ぶつかつた踊り場の鏡にヒビが入つて床に崩れ落ちる。

それを、龍一郎と直人は青白い顔で見つめた。

あれが一人に落ちていたらどうなつていただろう。

細いから良いといつわけでは無い。ある程度の長さがあつて、程よい肉付きと透き通るよつな肌があつて初めて、綺麗な脚といえる。その扱い方も美しくなければ意味は無いが。

大人の女性は大変だな、と早苗は思つ。病院の待合室に座つてゐる若い女性をみて、ふと思つたのだ。

顎のラインで切り揃えられた髪の毛も艶があつて色氣を感じさせる。襟から覗く鎖骨が艶かしくて、見る事が罪の様だ。長い指には指輪が光つているが、それは右側の方だつた。

「かわいらしいお嬢さんね。」

若い女性はにっこりと笑いかけた。じつと見つめていたのがバレてしまつたのだろうか。顔を真つ赤にして早苗は、直人の様におどおどしてしまつた。

「照れなくていいのに。あなた、

中学校の生徒なの？」

「は、はい。」

「あそここの制服、カワイイから羨ましかったの。私、美術も音楽もからきしダメだったのよね。」

「ピアノをやつてるんですね。」

「そう。」

早苗は一人きりの待合室でドキドキしていた。初めてあつたのに不思議と話しあげたくなつてしまつ。

「お見舞いですか？」

聞いた後で早苗は物凄く後悔した。この階は集中治療室に運ばれたり、生死をさ迷つてゐる患者ばかりなのだ。余計な事を聞いてしまつたと、早苗が落ち込んでゐる。

「違うわ、友人を待つてゐるのよ。」

と、答えたのでほつとした。

ん、待てよ。病院を待ち合わせにする人間なんているのだろうか。

「友人も、あなたと同じ学校に通つてるわ。」

「その人つて……。」

「あなた。橋爪早苗さんね。」

女性の顔が歪んで見える。

突然、早苗が激しく苦しみだした。

「大丈夫？」

「うつ・・・お腹が。いた、い。」

女性の柔らかな手が早苗の背中を摩つた。

「歪んだわね。」

「何？」

女性の方も、よく見ればうつすら汗をかいてゐる。

「多分、もうすぐ終わるわ。」

ドアが開く音がすると痛みは治まり、中から直人が現れた。

「神崎君。」

直人は、早苗と目を合わせなかつた。小さなスーツケースを持つて、早苗ではなく若い女性のほうと目を合わせると、見たことのないような冷たい顔をしてスーツケースを差し出した。

「いいのよ、あなたのでしよう。あとで電話だけして頂戴。」

直人は、ばつの悪い顔をして早苗たちから遠ざかつていつた。

「反抗期かしらね?」

直人が病院の階段を駆け降りる。

「おい、神崎!」

聞き覚えのある声に呼び止められて振り向くと、原西だつた。ガ一ゼを貼付けた額が痛々しい。

「ああ、これは慌てて来たから転んで怪我したんだ。転んだのが病院で良かつたよ。」

と、恥ずかしげに笑う。

直人は申し訳なさそうに頭を下げた。

「すみません。僕が悪いんです。」

ずっと我慢していた涙が、今だとばかりに流れ落ちた。

「お前一人の所為じゃない。橋爪から大体の事は聞いた。徳田先生も一枚噛んでるんだる。」

「いえ、先生は。」

直人が否定するのを、原西はゲンコツで制止した。

「関係あるんだろうが。徳田先生が言つたこともちゃんと橋爪から聞いたんだ。なんで庇う?教師だからか。」

「そんな・・・。」

「いいか。神崎。」

「

原西は、階段に座り込んだ。エタノール臭で満たされた空間は、決して清浄な場所だとは思えなかつたが、諦めたように直人は横に座つた。

「並木の怪我は幸い骨折で済んだ。」
直人は何か言いたげだつた。

「でも・・・僕。」

原西の大きくて皺の入つた手が、直人の頭を掴んだ。

「そうだな。軽い重いじゃないよな。でもな、これは並木だつて徳田先生だつて同じくらい悪いんだ。発端は徳田先生だし、喧嘩を始めたのも並木からだ。」

「でも、僕がはつきり訳を話してれば、並木君は怒らなかつたし、怪我もしなかつたんですね。」

原西は、少し考えた後。

「さあ、どうだろうな。」

と、頭を搔いた。

「そういう可能性があるだけだ。それに起こつてしまつた事はどうしようもない。」

残酷な答えたが、原西は嘘をつくのは嫌だつたのだろう。
「何もかも、どれか一つの理由だけで起こるもんではないんだ。これが無くなれば、過去が変わるなんて・・・そう単純なものではないさ。だから、皆悪いんだよ。」

直人は、はつとして顔を上げた。

「どうか。だから、簡単に過去を変えられないのか。」

「何か言つたか？」

原西が怪訝な顔をした。

「いえ。」

「だから俺が言いたいのはだな。お前の中だけで完結することが、本当に正しい答えなのかよく考えた方がいいってことだ。」

「はい。」

「諦めて欲しくないんだ。先の事はまだ決まってない、自分が将来

を作るんだぞ。お前一人で何もかも解決できると思うな。それが正しいことだとも思うな。間違つてもいいから、この世界とちゃんと向き合え。」

直人はスースケースを抱きしめた。幼い子供がぬいぐるみを抱くように・・・物言わぬ友達のように。

直人がポケットから、ヘアピンを取り出して前髪を上げた。涙でグシャグシャになった顔がはつきりと見えた。

「そのほうが、今のお前に必要な事を教えてくれるさ。だから、いいことを教えてやる。神崎がこれから変えれる事の一つ・・・一番始めにやらないといけないことだ。」

「何ですか？」

「並木とちゃんと話をしin。」

「・・・はい。」

フランフランと直人が立ち上がる。が、原西は慌てて直人を受け止めた。

「何だ、この怪我？ 一体どこで・・・」

原西の手は赤い。

「・・・これは。」

そのまま直人は意識を失った。

直人の告白

病室のドアを開けると、龍一郎は漫画雑誌を読みながらお菓子を食べている所だった。

「おー、直人。お前も食べる？」

「僕はいいよ。」

「あつそ。」

側の椅子に座つて、しばらく龍一郎の右腕のキブスを眺めていた直人が、小さな声で「ごめんね」と言つた。

「だからよー。なんでそうすぐに謝るんだよ。」

「龍一郎君が言つた事は当たつてたんだ。」

龍一郎は雑誌を横に置いた。

「当たつてたつて？」

直人は龍一郎の目をじっと見て、覚悟したように話し出した。

「あの時は、違うつて言つたけど。確かに徳田先生は、留学するなら一人とは付き合つなつて忠告された。一人の事、『クズ』だつて。だから僕、腹が立つて……。」

「もう、わかつたよ。」

「だつて友達がそんなこと言われるなんて……本当に腹が立つて。僕、こんなに怒つたの初めてだつたんだ。徳田先生があんな人だとは思わなかつたよ。それに……」

「もういいつて……ありがとうな。」

龍一郎が恥ずかしげに顔を背けた。使える方の手で鼻を擦りながら。

「俺も悪かつたんだよな。多分、ちょっと羨ましかつたんだと思う。お前は先生に気に入られてるし、早苗にも……だけど俺は、こんなどう。俺とお前が友達つてのも周りからしたら変に見えるんだよな。留学の話だつて、俺の方が上手いのに何で?つて思った。」

「じゃあ、本当は僕の方が上手いんだよ。」

「なんだとー。調子にノリやがって！」

殴るマネをすると、直人は吹き出した。

「よかつた。やつと、笑つたな。」

「あ。」

「そのほうが、似合つてんぞ。」

龍一郎が直人のおでこを触つた。短く切つた前髪は、もう彼の瞳を隠すことはできなかつた。

「それと、俺。聞きたいことがある。」

直人が首を傾げた。

「お前なんだろ。俺の腕、くつつけたの。」

ギブスのついた腕を軽く振つて見せた。

直人は、少しだけ視線を外して。

「始めから、龍一郎君の腕は折れてたんだよ。」

「やっぱ、お前。嘘が下手だな。前髪無くなつたからバレバレ。」

龍一郎が笑つた。直人も笑つたが、観念したように両手を上げた。

「本当は、何もなかつたようにしたかったんだけど、限界だつた。これ以上の事をすると皆が危険な目に合うから。」

「お前つて、その・・・何でも出来んの？」

「その辺はまだ詳しく聞いてないんだ。」

直人は困つた顔で答えた。

「実際は、僕の力じやないんだ。イプシロンつていうのがあって、イプシロンの力が凄いんだ。僕は、ただの持ち主だよ。」

「ドラえもん・・・のび太みたいなやつか。」

「ちょっと、違うかな。」

直人が笑つた。

「僕しかイプシロンの力は使えない。イプシロンに、選ばれた僕だ

けしか、使えないんだ。」

「その何とかつて力で、地球を救つたりするのか？」

「まさか」と直人は首を振つた。

龍一郎はいまいち納得が出来ないようだつたが、あまりに確信を持つて直人が言うので、それ以上の事は聞かなかつた。いや、聞けなかつたのだろう。

これから先は、多分。世界が違う。

そんな気がした。

思い出したように机のお菓子を食べ始める。

「なんか、今度見に行く映画の話しみたいだな。」

「橋爪さんと、行くんだよね。」

「あ、ああ。俺達・・・その。」

龍一郎は顔を真つ赤にして俯いた。

「鈍い僕にだつてわかるよ。良かつたね、龍一郎君。」

友人は無言でお菓子を食べ続けた。

笑つていた直人が突然、発作の様に両手で顔を隠した。きっと、もう隠すものがなくなつてしまつたから、こうする事でしか自分を守れないのだろう。

「あのね。」

「どうしたんだよ、突然。」

「あのね、こんな僕を嫌いにならないで欲しいんだ。」

「ならねえよ。」

「ううん。今から言つことを聞いたら、きっとキライになるよ。」

「何だよ。」

長い指の間から、まだ言つことを迷つてゐる目が泳いでいる。熱帯魚の様に水槽の中を泳いで永遠に繰り返される物事を暗示しているようだつた。

「言えよ。俺、もう何言われても驚かねえし。」

「人を殺したことがあるんだ。」

「この力を使って、同級生を殺したんだ・・・燃やした。」
だから、火が怖いのか。

そう龍一郎は思った。

「本当は、生き返らせてあげたいんだ。でも、それは、イプシロンには出来ないんだ。過去を変えるのは、簡単には出来ないんだ。その子を生き返らせるには、この世界を犠牲にしないといけないんだ。」

「俺の腕だつて過去を変えたつて事なんだろ。俺の事は、助けたんだな。」

「・・・キライになるだろ、僕のこと。僕だつて自分のこと嫌いになりそうなんだ。」

「俺を助けて、何か影響があつたのか？」
「説明すると難しい話なんだけど、最小限に留めてる。」

龍一郎はボリボリと頭をかいた。

「女子だったら、嬉しいんだろうな。『きやー私の為にそこまでー』つてな。」

直人は笑わなかつた。

「俺、多分ジコチュウなんだろうな。」

直人はまだ、顔を隠したままだ。

「あの時もう弾けないんだなつて思った。あんまり覚えてないけど。だから・・・世界の終わりだと思った。お前のいう世界とは違つて、俺のはちつぽけな世界だけだ。だけど、大体人間の考えている世界なんてそんなもんだと思うんだ。普段は自分中心の世界だと思ってるし。地球規模で考える事なんて、テレビとか授業の中とか、どこか別の所の話だと思って分けてるんだよな。だから、本当に俺は自分がことしか考えてないんだと思う。俺は、酷い人間だと思つ。」
直人の顔に張り付いている手を、龍一郎は引き剥がした。

「ありがとう、直人。」

涙でぼろぼろになつた顔が見れるんじゃないかと龍一郎は思つていた。しかし、そこには今まで見たことのないような精悍な顔つきが現れたので、一瞬別人なのではと龍一郎は思つた。だけど、すぐに情けない顔に戻つたので、ほつとして握つた手を解いた。

「そろそろいかなくちゃ。」

「そつか。」

名残惜しそうに龍一郎が、直人の腕を握つた。ギブスの付いた方の腕だ。

「俺が前みたいに弾けるようになつたら、また三人で・・・。」

「ありがとう。じゃあ・・・。」

「離れても友達でいような。」

「うん、メールする。」

病室の外には、大きなキャリーバックが置いてあつた。
直人は、それを転がしながら時計を確認する。

「あと、三時間か。」

『間に合つのか？』

いつの間にか傍にいたのだろうか。

皺枯れた、老人の声がした。

「そんなの、君がいれば大丈夫でしょう。」

エレベーターのドアが開くと何くわぬ顔で入つてゆく。

「でも。ちょっとだけ、よりたい所があるんだけど・・・お願いしても良い？」

一人ぼっちの箱の中で直人はボタンを押さずにキャリーバックを軽く叩いた。

『直人の望むところなら何処へでも。フランスでも良いが？』
『いや・・・そこまでは良いかな。』

遅れて、龍一郎が追いかけて来たのを直人は気づいていたのだろうか。エレベーターに乗った直人に間に合ったとばかりに、急いで開閉のボタンを押した龍一郎が愕然とした。

中にはずの友人が、何処にもいなかつたからだ。

「お花を手向けにいつたんですつて？」

まもなく離陸する飛行機の中で、直人は愕然とした。

隣の席には若い女性、古林美智子が待っていたからだ。

「誰から聞いたんですか？」

小さなスーツケースを開けると、中には白いスリッパが入つていた。それに履き替えると、幾分か窮屈な機内もマシになるというわけだろう。

「フランスまで、付いてくるんですか？まさか、下宿先まで？」

直人が、怯えた様子で体を古林から遠ざけた。

「いいえ、私も仕事があるの。だけど、お望みなら付いていつてあげてもいいわよ。」

長い足が美しい曲線を描きながら組まれる様子をみて、思春期を迎えた青年が顔を赤くしない訳が無い。

「ま、カワイイ子。」

「いい加減にしてくださいよ。ちゃんと向こうつでも連絡はとれるようになりますから。」

「前に、会ったときはもつと素直で良い子だったのに・・・大人になつたのね。さつき見送りに來てたのは彼女かしら？そりいえ、病院でも会つたわね。」

「ただの、友達です。根掘り葉掘り調べるんですか？MNKつて。」

MNKとは、日本に存在する（はずの）組織である。

未知（M）能力開発（N）研究所（K）の略名で、まだ解説されていない不思議な力を調べる組織団体で彼女はそこの職員なのだ。

「いいえ、ただの個人的な興味よ。ごめんなさいね。」

古林は、細い指で揃つた髪を撫でた。

「それより、イプシロン。あなたの所為で私、とても大変だったのよ。今だつて、頭痛薬を鞄に入れてるの。思い出したように頭が痛くなるんだから。」

直人の細い脚を睨みつけた。

「『めんなさい、あの時の事ですよね。僕、精一杯考えたんですけど。あれしか方法が思いつかなくて。』

『そうだ。直人は悪くない。それに、お嬢さんに文句を言われる筋合いはないな。我々だつて、どんな風に歪みが起こるかなんて分からぬのだから。』

皺枯れた老人の声が、直人の足元から聞こえてくる。

「まあ。」

彼女の美しい足の先、とがつた靴が青年の脚を小突いた。

『直人は、非常に頭の良い子供だ。私の見込んだとおりだつた。彼の提案を持ちかけられたとき、私はあまりの利口さに拍手をしたかつた。もちろん、そういう気持だつたという話だが。』

『手がないですね。』

勝ち誇ったように古林が言つのを、何でも無じようにイプシロンは話を続けた。

『歪みは、過去を変えるときに起こるもの。その重さは事実に関わつた人間に比例する。それを十分に直人は理解しているという事だ。どちらにしろ歪みを起こすなら、最小限にする努力をして欲しいものだ。』

「なるほど。事実に関わる人間の範囲を絞つたつて事ね。」

直人は、表面的に微笑んだ。

「ええ、そうです。腕を元通りに戻すとなると、龍一郎君が怪我をしたことを知つている全員分の歪みが起きる。でも、『怪我をした』

「こうなった事実を残しておけば、『腕が切断された』事実を知る人に限られてくるから、ずっと少なくなる。ちょっとかもしけないけれど、歪みはマシになるんでしょう？」

「そうね、理論的には。そうでしょう。」

『賢い子供だよ。アルファの言つたとおり、冷静すぎる所もあるが・・・私の持ち主として不足は無い。』

イプシロンが自信たっぷりに言つので、直人は顔を真つ赤にして「あんまり大きい声を出しちゃダメだよ」と下を向いて指を立てた。「その様子じゃ、留学先でも仲良くやっていけそうね。安心したわ。」

古林がクスクス笑いながら、そして思い出したように鞄から資料を取り出した。

「一つだけ確認したいことがあるの。」

「はい。」

「これは、どういうことなの？」

それは、診断書だった。

「耳の検査をしたのね。」

「ええ。」

青年は、点数の悪いテストが見つかったような顔をした。「歪みが起きたときでしょ。どうして言つてくれなかつたの？」

「問題はありません。」

『歪みは、持ち主にだつて起つる。君だつて知つていただろ。』『長い指が直人の右の耳に触れた。』

「ええ、そう。知つていたのよ。でも、まさかこんな所だなんて・・・」

右耳の近くで指を鳴らしてみる。直人は驚く様子もなく、むしろ気づいていないようだ。

『診断書には問題なしつて書いてあるでしょう。』

青年は、古林の手を掴んだ。

「そうのことです。」

「でも・・・。」

「イブ・シロンの耳を借りることにしたんです。ピアノを弾くときだけ。」

「じゃあ、診察を受けたときも？」

「方耳が聞こえないんじゃ、留学なんてできるわけ無いでしょう。僕は決めたんです。勉強してピアニストになるつて。それに、イブ・シロンがずっと一緒にいるんですから。何があつても乗り越えられますよ。」

古林は、何だか申し訳ないような気になつて「ごめんね」と呟いていた。直人の性格が移つたのかも知れない。いや、もしかすると二人は似たもの同士なのかも知れない。

「古林さんの所為じゃないんですから。それに・・・僕は、この方がいいと思ってるんです。」

丁度、飛行機が離陸を始めた。

超音波のような高い音が、鼓膜を掴んでいるようだ。

「僕は、やっぱり何もかも忘れるのはズルい事だと思うんです。あの子の事も、龍一郎君の事も、忘れてしまえば幸せなのかも知れない。でも、それは僕が許さない。」

涙は流れない。

優しく髪を撫でる手が、少しだけ震えている。

「強くなつたのね。」

彼女は笑つているのだろうか。

少しだけ、ぼやけた視界が直人を苦笑させる。

「まだ、そんなに強くないです。今だつて、ほら。涙が溜まつてゐんですから。」

古林の口から笑い声がこぼれた。

「そうだわ、フランスについたら会つて貰いたい人がいるの。」

「はい？」

「大学の教授なのよ。ちょっと変わった人だけど、あなたに会つたらきっと喜ぶわ。その時間はあるかしら。」

「た・・・多分。」

機内アナウンスが流れた。それを聞いて古林の眉間に皺が入つた。
「まあ、大変。『天候が悪くなつたため、空港に引き返します。』
ですつて。」

残念そうに窓の方を見ると、どんよりと黒い雲が今にも飛行機を
包み込んでしまった。

「ねえ。これつて、どうにか出来るの?」

直人がイプシロンに囁く。

『勿論。』

途端に、飛行機の中が真つ暗になつた。

飛行機の中で風が吹くはずが無いのに、強い風が後ろから前へと、
乗客の叫び声を攫つて行きながら大気中へと飛んでゆく。
まるで、生きている様だ。

オオオオオ

猛獸のような唸り声が、空一杯に響き渡る。
黒い雲が、恐れをなして逃げてゆく。

眩しいくらいの快晴。

「ありがとう。」

古林が、直人の腕の中に抱かれているスリッパを撫でる。

なぜだろう。

兎のような真っ白でふかふかのスリッパが、満足そうに寝息を立てているようにも見えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4717u/>

イプシロンの咆哮

2011年7月28日03時11分発行